

川まちづくりにおける地域社会の協働過程に関する研究

Study on collaborative processes of region society in Community Development based waterfront

熊本大学大学院自然科学研究科社会環境工学専攻 091d8825 馬場 啓維

1. 序論

本研究の目的は、川まちづくりにおける地域社会の協働に必要な要件を考察することである。そのために、各対象地の現在までの川まちづくりにおける地域社会の活動に着目し、その変遷を整理する。次に、地域社会という見えない概念について、グループ・ダイナミクス理論を活用してそれらの活動を可視化する。そのうえで、地域社会の集合流の動態を活動の構造との関係から分析する。

2. 近年の川まちづくりにおける地域社会の活動の変遷

本章では、まず地域社会を以下のように定義した。

- 1) 市民…地域住民が地域内へ向けた活動を行うために自発的に発足させ、まちづくり活動を行う組織とした。
- 2) 行政…国の機関や、県、市町村などの地方公共団体に属する組織とした。
- 3) アソシエーション…NPO や企業などがまちづくりのために自発的につくる集団や組織とした。

この定義を踏まえて、研究対象を水郷・柳川、水都・広島川まちづくりとし、それぞれの活動の変遷を整理した。そして、個々の活動の内容について、活動の「中心となる地域社会」、「活動に参加した地域社会」、「活動の目的」を明記したデータベース（以下、DB）を作成した。

3. 川まちづくりにおける地域社会の活動の可視化

本章では、2章のDBを基に活動を、グループ・ダイナミクス理論（以下、G・D）を活用し可視化した（図1）。厳密には、筆者は地域社会の活動の当事者ではないため、G・Dを行っているのではなく、G・Dを活用して、活動を試験的に可視化するものである。G・Dの概念は、集団を変化していく存在として捉える。

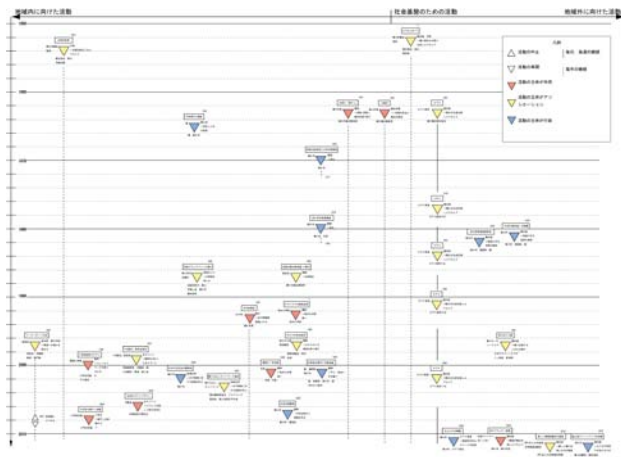


図1 G・Dを活用した活動の可視化

4. 地域社会の協働に関する考察

本章では、川まちづくりにおける地域社会の協働に必要な要件を考察した。そのために、まず、時間軸と活動の対象で表わされる集合流の変化とその変化に基づく活動の主体と集合体の変化を分析した。次に、集合流の大きな変化期における具体的な活動を取り上げ、G・Dに基づきその活動をするために必要な「道具」を分析した。

(1) 集合流と活動の主体と集合体の変化に関する分析

各対象地の地域社会の集合流の変化を、時間軸と活動の「対象」の2つの軸を基に分析した。そのうえで、集合流の変化期における地域社会の「主体」の変化と「集合体」の変化を分析することで、最も大きな集合流の変化が起こった時期と、その時の中心となる活動の「主体」を考察した。

(2) 地域社会の集合流の変化の要因に関する考察

(1)に述べた各対象地の集合流の変化の要因を、活動の「道具」を視点に考察した。その結果、柳川では、以前からある活動の経験や得た知識が地域社会の集合流の変化の要因になると考察した（図2）。

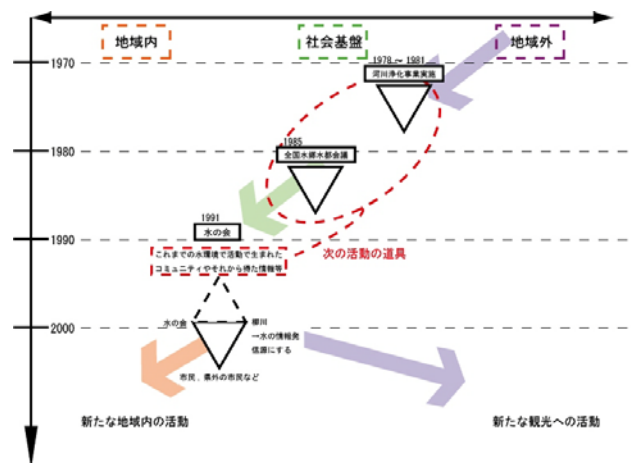


図2 柳川の集合流の変化の過程

(3) 地域社会の協働に必要な要件に関する考察

川まちづくりにおける地域社会の協働に必要な要件を考察した。協働に必要な要件は、まず、(1)で分析した地域社会の集合流の変化とそれに伴う活動の主体と集合体の変化から考察した。次に、(2)の各地の具体的な活動の分析から分かった行政の役割を行政の政策や計画の面から考察した。

5. 結論

本研究は、川まちづくり活動を G・D 理論を活用し可視化することによりその変遷を明らかにした。今後は、地域社会の活動と実空間の関係を分析する必要がある。